

「原爆文学」再読7——青来有一『爆心』報告

楠田剛士

本特集は二〇一九年七月二八日に開催された第五九回原爆文学研究会で行った「原爆文学」再読7——青来有一『爆心』の報告内容を記録するものである。

長崎在住の青来有一は、最初の単行本『聖水』（文藝春秋、二〇〇一・二）から近作「フエイクコメデイ」（すばる）二〇一八・九）まで、長崎原爆の記憶を小説に描き続けてきた作家である。今日の原爆文学を考える上で重要な作家の一人だが、十分に読まれ論じられているとは言い難い。青来の小説の問題と可能性を議論したいと考え、再読では『爆心』（文藝春秋、二〇〇六・一）を取り上げることとした。当日はまず楠田剛士が『爆心』の受容史を整理した。次に畑中佳恵氏が『爆心』で繰り返し描かれる表象について青来の他作品と関連させながら考察した。そして四條知恵氏が「虫」に注目した報告を行った。個別の報告はそれぞれご覧いただきたい。ここでは発題後に行われた全体討論の内容をお伝えする。

まず青来と遠藤周作との関連について質問があった。神の不在

が問われ続けて虚のように埋まらないことや、信仰を持たない者としての虫についての報告があったが、例えば『沈黙』を書いた遠藤周作のように既存のキリスト教を批判しようとする視線があるのかどうか。これに対して畑中氏は、青来作品では隠れキリシタンの信仰が一番の問題になっており、『爆心』では既存の神との関係はほとんど詰められておらず、問題としても浮かび上がってこないと答えた。また『爆心』後の展開として「人間のしわざ」（すばる）二〇二一・一、「神のみわざ」（すばる）二〇二一・一）などを発表しているが、そこで作者は虚の問題に対して信仰の問題として答えを投入していく作業に没頭していったように見えると述べた。四條氏は永井隆の燔祭説を引きながら、なぜ浦上に原爆が投下されたのかという問いは同じだが、永井は明快に答えを出す一方、『爆心』ではあえて答えを出さない選択をしているのではないかと述べた。

次に「西日本新聞」長崎県版に掲載された青来の記事に関する話題提供があった。記事では、素朴な物語を書くことに限界を感



じたこと、技法を繰り返すことに飽きたこと、新しい小説を探るなかで「釘」が執筆されたこと、二〇〇五年に林京子全集の発刊イベントで林から自由に書いていいと言われたが被爆者の一人称小説は書けなくなったこと、「愛撫、不和、和解、愛撫の日々」(文學界「二〇一四・三」)で被爆者との関わりを描くことで行き詰まりを抜け出したことなどが述べられていると紹介された。これに対して楠田は、『爆心』の初刊刊行時でも創作背景や新しい原爆文学の模索について語られていると答え(青来有一、聞き手「本の話」編集部「被爆後六十年の原爆文学」「本の話」二〇〇七・一一)、畑中氏の報告資料に「断片的な私小説的手法の移行が試みられている」とあったように、近年は遠藤周作、林京子、石原慎太郎との対話を描く作品が特徴的だが、最新作「ノンセクトラジカル」(「三田文学」二〇一九・八)ではまた方法を変えてきているように感じるとコメントした。

次に動物と虫が話題になった。3・1以後の小説、たとえば古川日出男や川上弘美などの作品には馬や熊など動物が描かれている。古川は東北と馬の歴史を調査して書いており、人間が馬の気持ちを表現できるかという問題を突き詰めている。しかし『爆心』では虫の視点から書かれているのではなく人間中心の視点から描かれており、人間の生活、感情、考えを表現するために虫が利用されているように感じるが、これについて何か考えはあるか、という質問があった。これに対して畑中氏は、3・1後の小説においても動物は利用されているのではないかと述べた。四條氏は、『爆心』は人のために書かれた小説であるが、これまでの証言と



報告 楠田 剛士

は違った語りを提供していると思うと述べた。

フロアー間でも動物について意見が交わされた。3・11後の場合、被災地から出ると言われて出される人間や、牛飼いとして残る人間もいるが、動物は避難できない存在として

可視化され、小説に描かれやすくなっているのではないかという意見が出た。また3・11後、動物たちの未来を考えるきっかけを与える小説が増えた印象があり、一方原爆は死体と虫が結びつくイメージがあるという意見も出た。こうしたやりとりを受けて、四條氏は、虫の被害を描くなら自然科学ということになるが、『広島・長崎の原爆災害』を繰ってみると虫と動物の被害は二頁だけで被爆直後は人間も虫も被害もよく分からないため、自然科学でも人文科学でも虫の被害は空白になっていると述べた。

関連して環境文学の視点からのコメントもあった。いままでの人間中心主義ではなく人間も環境の一つだという環境文学の考えがある。林京子はトリニティに行ったときに大地そのものの死に非常に衝撃を受けたが、全体の死に対するまなざしは青来作品にはないといつてよいか。これに対して畑中氏は、青来にとつては虫の生命力が被爆地の復興をもたらす希望の光景になったことが非常に重要だったようで、いろいろなところで語っていると答えた。楠田は、青来の小説の関心は原爆が人間に何をもたらしたのかにあると答えた。

表現についての質問もいくつが出された。一つは性描写である。



報告 畑中 佳恵

『爆心』のなかで起こる出来事や、歴史的な原爆の語りから離れていくときにキーになるのが欲望である。欲望の対象や欲望の仕方が、メタファーとして、メトミニーとして原爆に結びついてくことを意識的にやっている作品だと思った。だが男性・

女性の性欲が単調で、ステレオタイプになっているように思う。原爆の語り方は更新されている気がするものの、かえって通俗的な恋愛や性差を補強している感じがするが、青来作品における恋愛についての考えを聞きたいという質問があった。これに対して畑中氏は、異性間の性器に焦点を当てるようなものになっているのはその通りだと思うが、表現においては通俗性を求めながらも典型的なものから離れて、少し刺激を与える形にしようと模索しているのではないか。表現そのものが官能小説と同じかどうかは研究しないとわからないと答えた。

作中で繰り返される「虚」のイメージについて意見があった。六篇それぞれに「虚」がある構造は分かったが、「虚」の反響とは何か気がなった。また六篇の順序の必然性をどのように考えているか。「釘」は土地に縛られ逃れられない話であり、「鳥」は原爆のときに拾われて土地とのつながりの無さに苦悩している話であるように、「虚」に対する向き合い方が否定的なものもあれば、そうでないようなものもある。「虚」をイメージでつないでいくとして、「反響」といったときに読者のレベルで、登場人物のレベルで何が起こっているのかを知りたい。これに対して畑中



報告 四條 知恵

氏は、「虚」の反響は二つの太鼓の片方を鳴らすともう片方が鳴るといふくらいでイメージしている。虚から虚へというのは青来が書いていることであり、作品を超えて読み手の中で隣接させられていくのではないかと答えた。

作者についても話題に上った。青来は本名の中村明俊としては原爆資料館館長としてこの三月まで勤めていた。平和行政の顔として世界に長崎を発信していく立場にあり、3・11もあつた。こうしたことが作家の立場とどのような関係性にあるか、館長を辞めたいま作風は変わるのか、自由に書けるのか、という質問があつた。これに対して楠田は、「フエイクコメディ」のように近年は原爆資料館館長でもある作家が語る作品が続いていたが、最新作「ノンセクトラジカル」はそうではない。さきほど紹介があつた新聞記事で、書くのに飽きたという作家の発言が取り上げられたが、小説家としていろいろな方法を試してみたい気持ちがあると思うと答えた。畑中氏は、二〇一九年四月からは長崎大学核兵器廃絶研究センターの客員教授になつていたので何をもつて「自由」といえるか。資料を追つていくなかで立場に縛られた不自由さよりも、読者や評者が述べたことをとても気にされる方のように感じる。デビュー作「ジェロニモの十字架」を私小説に模して書いたことが読者を引つ掛けていると評されたため、その方法はもう使わないという発言や、編集者が受け入れないからという発言もよく出てくるので、基本的に不自由な方だと思つたと述べた。四條氏

は、館長を辞める前は作風はどう縛られていたのか、青来の小説をカトリック教会の方はどうとらえたのか気になると述べた。

その他、小説とラジオドラマの違いに関する質問、青来の文学的な素養・背景を知りたいという質問などがあつた。これについて楠田が、ラジオドラマの脚本は青来自身によるもので枠組みは同じであること、映画は青来が認めた改変であること、大江健三郎や宮澤賢治を熱心に読んだと作家が語っていること、石原慎太郎が芥川賞の選考で高く評価し、受賞後に対談していることを説明した。

約五〇分の討議でも議論は尽きなかった。残された課題も多いが、本再読がきっかけとなり、青来の個々の作品の読み直しや青来文学の研究が活発になることを期待したい。全体討議に参加された皆様にお礼申し上げます。

※特集にあたり科学研究費補助金(若手研究 19K13056)の助成を受けた。